

安永期における美角・定雅の俳諧活動：西村定雅年譜攷(一)

田邊, 菜穂子
国文学研究資料館非常勤職員

<https://doi.org/10.15017/19764>

出版情報：語文研究. 106, pp.1-14, 2008-12-26. 九州大学国語国文学会
バージョン：
権利関係：



安永期における美角・定雅の俳諧活動

— 西村定雅年譜攷 (二) —

田 邊 菜穂子

活動を、諸資料により確認し、美角のそれとともに年譜の形をもつて示した。

二

凡例

一、本稿は、明和九年——天明初年の定雅および美角年譜である。^(注)なお、これ以前の二人の活動については、管見にして殆ど知るところがない。

一、西暦の下に定雅の年齢を示したが、これは藤井紫影「江戸後期の京阪小説家」(『江戸文学研究』所収)中の「文政九年八十三歳にて没し」より逆算したものである。定雅の菩提寺である善導寺(京都市中京区)に存する墓碑、過去

安永九年春、美角歿。西村定雅の俳諧活動はこの時まで、常に兄美角と一緒にであった。その様を、几童は「美角・定雅の兄弟は、志高山流水のごとく俳諧に遊ぶ事他なし」(『はなごのみ』跋文)と、伯牙・鍾子期の関係になぞらえている。伯牙は鍾子期死して後、琴の弦を断ち、再び弾くことはなかったが、定雅は美角の死を契機に、俳諧師として、さらには洒落本作家として、飛躍してゆくこととなる。

そこで本稿では、定雅にとつて、俳諧師としての揺籃期といふべき明和から天明初期の活動を、すなわち定雅最初の編著である美角一周忌追善集『はなごのみ』出版に至るまでの

帳及び盆欄帳に享年を示す記載はない（善導寺御住職・小川隆宏氏御教示による）。

一、年譜中、定雅自身のことは、美角については、両方に関係することは、そのほかは、をもって示す。

安永元年（明和九年一月一六日改元）壬辰（一七七二）二九歳

三月末、美角、無角大徳より既白宛の句を賜わる。さらに、美角・定雅、春興句を詠む。

管見によれば、定雅および美角の活動は、明和末まで遡ることができ。

流義感心之余東山之句ニすかり願生の心を真似て一句
月にほふ西へ心もそふて入

右無角大徳尊老君の御吟

と八に雲のうへにあそひ給へる大義知識のいやしき
道心かはいかいを御耳にふれられ、かくありかたき
御染筆やよひのすへつかた美角にあふせてくたし給
りける。まことに風雅の冥慮、生前死後の忝さのあ
まりに、あまたゝひ拝吟したてまつりて恐れながら
御脇を申あげたてまつり侍ける

歡喜の袖にはなのつゆちる

既白

拝上

春興

諸人八かへりて月のさくらかな

美角

そてに顔に桜ちりかゝる月夜哉

定雅

初夏吟

滝の雫卯の花染るゆふ日かな

既白

壬辰のとし

橘治梓

これは近江八幡西川家に伝わる俳諧一枚摺りで、かつて古市駿一「近江八幡豪商西川庄六所持 大文字屋文庫翻刻紹介撰（八）——既白・樽良近江八幡来訪のことども——」（「義仲寺」一三九号（昭和五年八月）に掲載されたものである。既白発句より、同年春夏頃（注2）の歿とされる既白の歿時は同初夏以降となる。

既白と兄弟の関係は、この一枚摺りのみではない。寛政一〇年に定雅は『（注1）惟然法師追善 風羅念仏』を刊行。土卯跋文（注3）によれば、既白は入寂の際、「椿花」すなわち定雅に風羅念仏を託し、更に惟然短冊を与えたという。恐らくは、その場に美角も在っただろうが、兄は他界し、弟一人での出版となった。また、天明五年刊『新雑談集（注4）』には、

一、いせの龍石と、定雅がもとにて会催しける時、

旅駕のやねに付ケたる小風呂敷

定雅

奈良にて買し虫おさへのむ

几董

客が来て近所の人の立てゆく

龍石

とあり、既白の息男である龍石との接点も認められる。

安永二年 癸巳（一七七三） 三〇歳

正月頃、父没す。一月十日、善導寺に墓碑建立（後述）。

安永三年 甲午（一七七四） 三二歳

蕪村編春帖（全集7）に美角・定雅各発句一入集。「春興
ノ若なつむ此日は朝のあさくし 美角」「なまめきて箆の
若菜のこぼれけり 定雅」。この頃より、兄弟の句は京の俳
書を中心に散見されるようになる。

四月、美角・定雅は上洛した暁台・土朗・都貢を款待し、

東山散策、地主神社に参詣（『幣ぶくろ』（全集8））。十日前
後のこと。

「けふよりの興は師とはかりて、都の友がきを具し
出ん」といふまゝ、たれかれとともに、東山浅く見
めぐり、地主にまうでん

嵐ふけ地主のさくらの実や落む

都貢

藤つゝじおもへば夏のはじめかな

京 定雅

あやしくもあらず人声の山若菜

美角

夏陰や鐘に石うつ田舎人

ミチノフ 文芝

定雅「藤つゝじ」句は、定雅の句文集である『椿花文集』
(天明七年刊)に再録、その詞書には「岩倉の道にて」。

四月一五日、美角、門阿弥亭にて行われた俳諧興行（『幣
ぶくろ』）に出座。几董編『宿の日記』（全集3）に「四月十
五日紋阿弥亭おひて興行」、『幣ぶくろ』に「門阿弥にて、は
いかいの連歌すとて」。蕪村「夕風や水青鷺の脛をうつ」を
立句とした歌仙。連衆は、蕪村・宰馬・大魯・土朗・几董・
都貢・美角・暁台・丈芝・嵐甲。定雅の名はない。

十月、暁台再び上洛、美角宅に滞在する。美角・定雅兄弟
で款待（『えぼし桶』）。

義仲寺の芭蕉墓前で詠んだ暁台句「霜に伏て思ひ入事地三
尺」を立句に芭蕉八十年忌の連句。連衆は一音・蕪村・美角・
几董・嵐甲・百池・我則・呑溟・定雅・甘蘭。この歌仙一巡
について満田達夫氏は「義仲寺での暁台の発句を立句にして、
俗月楼（田邊註：美角亭）で興業されたものか」（全集2）
という。

高雄散策（蕪村句詞書に「頃は神無月十日あまり」）同行。
その折の句は、「頃は紅葉のためのながれ哉 美角」「山寒

く折に一むれちるもみぢ 定雅」。定雅発句は『椿花文集』に再録（「高雄にてノ冬寒し折に一むれちる紅葉」）。同行したのは、ほかに几董・甘蘭・一音・呑涙。

この他『夏ぼし桶』に掲載される美角・定雅の句は、芭蕉追悼句（「したはしき月の落葉や手向の夜 美角」「うき頃をいとゞしぐれの此日哉 定雅」、高雄山からの帰途、竜安寺の池辺で詠んだもの（「をしの雌のおくれては江のいそぎ哉 美角」「池の鴛老しすがたの見へぬかな 定雅」、冬の句（「月折くくもるを雪のゆき明り 美角」「つやくと葉に照る月や冬椿 定雅」、暁台への饒別吟（「暮雨菴の宗匠が帰杖をとゞむるに、日なくて、夜すがら灯火に別情を告ぐノわかれかねて心苦しく冬あつし 定雅」、暁台・定雅・江涯・美角・呑涙・甘蘭の連句一卷（立句は「忘れ花祖父が恋のすがたかな 暁台」）。

六月序、白居（丈芝）編『片折』（全集8）に、美角・定雅各発句一人集『月の後霜に静けし夜の秋』（花洛）『定雅』諸人は帰りにて月の桜かな、美角」。本書は、暁台門の丈芝剃髪（花洛）の賀集として、また仙台への帰郷記念として編まれたもの。剃髪の日（花洛）に巻かれた連句一卷に続いて諸家の発句を掲載。

「花洛」からは、蕪村・几董・定雅・美角のみ。蕪村句は

「幣ぶくろ」中に収録されている門阿弥亭連句（四月一日）の立句。几董句「イめば」も、『秋しぐれ』（明和九年序、兩人編）『続明鳥』など多くの俳書に載る句。美角句は、明和九年の既白一枚摺に掲載されたものと同じである。さすれば、収載された句の多くは、「おりく短尺に乞ひ得し四時の吟」とある通り、『片折』の為に新たに詠まれたものではないのであろう。定雅句は『椿花文集』に「月の後霜にしづけし夜の秋」。

冬、江涯冬籠之俳諧摺物（全集7）の文音中、蕪村、几董に続いて美角・定雅の句が載る。「つもる後はたゞちるまでの小雪哉」（花洛）美角「更る夜やひたと雪ふる雪のつへ、定雅」江涯が残した俳書に安永五年序「張瓢」、安永六年序「仮日記」、天明四年序「浪速住」の三種があるが、美角生前に成った「張瓢」、「仮日記」には兄弟の発句及び江涯との連句、また「浪速住」には定雅の発句、やはり江涯との連句が収載されている。更に美角一周忌には江涯の追悼吟が寄せられており（「はなこのみ」、美角・定雅との親交は深い）。

安永四年 乙未（一七七五） 三二歳

蕪村編の安永四年春帖（全集7）に定雅・美角各発句一人

集。「春興ノ立よれど同じ匂ひやむめの花 美角」「蝶ノま
ぎれて蝶の行衛哉 定雅」

暁台編、五月自序の『熱田三哥仙』に美角発句一入集
(「つもる後はたゞ散るまでの小雪哉 洛美角」。前年冬江涯
一枚摺掲載句と同じ)。同書に定雅の句は掲載されていない
が、「しみく」と冷える日石のひかり哉 洛貞雅」とある。

この「貞雅」が「定雅」と同一かは不明。同年秋跋、嵐山編
『猿利口』(全集8)にもまた「京 在世人」として「菜の花
の風に吹れて行野かな 貞雅」と見える。なお、どちらの貞
雅句も『椿花文集』になし。

「冬、江涯・珍松の板行した一枚摺」に美角・定雅出句。

『椿花文集』になし。「文通」、

眉しりをさけて濡行しくれ哉

京美角

初鐘礼はらくと我袖にふる

斗酔

冬の気しきや風に散時雨

定雅

小夜しくれうらこしも吹さそふかな

玄化

催して日晷になりぬ初しくれ

冷五

同冬「洛の蕪嵐が板行した一枚摺」にも兄弟で出句。『椿

花文集』に載録されず。「冬の吟」として「洛」の蕪嵐・女
とみ・玄化・江蒙・素因・無憂・女ため・女み祢・玉爪・書
零・化更の発句。「ハ」と区切り、

雪の柳風のなき日に見たりけり 美角

夜千鳥の鳴音かきけす嵐哉 定雅

また「ハ」、平松・石辺・良吏・阿山・鉄叟・女其英・有我・

岐皇雪江・東部山龍、「文通」ハマン江涯・玉島大阿・ナニ八雲羅・不夜

庵斗酔・闌更、「未のとし」で終わる。

安永五年四月一五日付霞夫宛蕪村書簡(『蕪村書簡集』)に
「一首も無事に候。半化も無事」とあり、闌更(半化)は四
年冬以降、翌年初夏頃迄に上京したようである。

安永五年 丙申 (一七七六) 三三歳

几重編の「初懐紙(全集7)に定雅・美角各発句一入集。

この年、蕪村自身は春帖を編まなかつたが、几重「初懐紙」
の校閲を行っていること、出句者の顔ぶれなどから推察すれ
ば、本書がこの年の夜半亭一門春帖である。「しづかさば猫の
わかるゝ月夜哉 美角」「寒ぞらや兒のきたなき鏡研 定雅」

幾夜庵斗酔編の「春興」に美角・定雅各発句一入集。甫尺・
玄化の兄弟の発句に続いて、蕪村・几重、美角・定雅と続く。

「連啼もせぬ鶯のふたつかな 美角」「春深し椿の落る水の音 定雅」。甫尺は京都の書肆。兄玄化の没後、吉田九郎右衛門の名を世襲した。生年未詳、文化元年四月没。^(注1)

江涯編「張瓢」（安永五年春序、「天明俳書集」三）に、「文音」各発句五句入集、さらに江涯・美角・定雅の歌仙一卷が収載される。「吹かせにおもたき花のうこき哉 美角」「正月の風に吹るゝ羽織かな 定雅」「卯の花にさはる袷のたもとかな 美角」「藤つゝしおもへば夏のはしめ哉 定雅」「玉棚や屏風にほそき灯の光 定雅」「朝風や節句こゝろに菊の花 美角」「枯ながら余儀なき風の尾花哉 美角」「更る夜やひたと雪降る雪の上 定雅」「散かゝるその花をのみ吹あらし 美角」「花さかり松に淋しき鳥の声 定雅」

東西にいそぎ南北にわしる
たかき有いやしきあり

牛吼る美角かかとの暑さ哉 江涯

夏の真昼のやゝ静なる 美角

ほろくくと一木の杓の落葉して 定雅

(以下略)

定雅句「藤つゝじ」は安永三年刊「幣ぶくろ」に既出、「椿花文集」に再録。「更る夜や」は、安永三年江涯冬一枚摺に

掲載済。美角句「枯ながら」は「はなごのみ」冒頭に載る。

四月、洛東金福寺に芭蕉庵が再興される。残照亭での記念興行に美角・定雅参加。立句は道立「植かゝるはしめはひくき田つたかな」（『写経社集』）、「天明俳諧集」二。「杜鵑・布穀」を題とする発句に「聞かたに鳴つるものをほとゝぎす 美角」「はつ音聞人そ誰なる郭公 定雅」。さらに「附録」、「はつ蟬のかしましからぬひとつ哉 美角」「夏の日の暮るゝを人の力かな 定雅」。

七月六日、几董、美角・定雅宅に來訪。

「六日も常の夜には似ず」と口ずさみつゝ、美角定

雅の二子を訪へば

六日たつ秋のこゝろやほし祭 美角

うすき影踏ム月の宵過 几董

車押広野ゝ薄かき分て 定雅

(以下略) (『続明烏』)

『続明烏』には、ほかに美角発句四句、定雅の発句五句入集。「小男に似あはぬ春の羽織哉 美角」「梅の花あたら香の開きけり 定雅」「暑キ日に飽し茄子の煮物哉 定雅」「納涼ノ涼しさや昼見し門に月の影 美角」「踊見る人のうしろや秋の

闇 定雅「夕月に誰やら恋し萩の原 美角」「冬ざれやきた
なき川の夕鳥 定雅」「積る後は只散までの小雪かな 美角」
（江涯冬籠之俳諧摺物、「熱田三哥仙」に既出）「夜を好ム我
に癖あり冬籠 定雅」。

八月二日(注)が、木屋町三(注)条の樽良宅（無為庵）での俳諧興
行に美角・定雅、出座（「俳諧月の夜」（「天明俳諧集」）。連
衆は、越中井波瑞泉寺十四世住職蘭台公・樽良・蕪村・集馬・
月居・路巧・呑溟・月溪・定雅・美角。立句は蘭台「雲散り
て月の動きのなき夜かな」。

八月一六日、無為庵にて魚春・樽良・越蕪・定雅・美角連
句（「月の夜」）。立句は魚春「十六夜の月は岡崎の辺りなど
見順りて無為菴に入ノ十六夜の月見やみやげ唐がらし」。な
お、「月の夜」には美角・定雅の秋句収録。「すゝきより萩よ
り弱し秋の風 美角」「猶寒し後口より吹く秋の風 定雅」。

麦水編、九月跋の「新みなし栗」（「天明俳書集」五）下巻
に美角発句一入集。翌六年四月刊。道立の句の後「客船無
レ酒風人を見る堤 美角」。

九月九日、布舟・北野の上洛記念「安永丙申五小摺物」に
美角・定雅の句収載。樽良・布舟・北野・美角・定雅の他、
蕪村・几董の句もあるという。未見。「几董発句全集」一五
四頁頭注による。なお、几董の発句は「重九 九日宴 宴/
けふの菊秋の泣顔洗ひけり」（「丙申之句帖」）。

十月奥太中庵(注)波編「菊の香」「文通四季句」に美角・定
雅句入集。在京者としては美角を筆頭とし、続いて几董・定
雅・呑溟・蕪風・玄化・蘭山・茶合・女柳絮・斗酔の句が並
ぶ。「定なき命に寒し後の月 美角」「水仙や外を見ぬ日の
冬こころ 定雅」

十月初旬、定雅、(注)波の上洛記念歌仙に出座（「時雨笛」
（「校註俳文学大系」一一）。立句「小夜しぐれ按摩の笛の遠
音かな 波」、連衆は波・樽良・春水・定雅・呑溟。

十月一二日、無為庵で行われた芭蕉忌興行に美角・定雅出
座。立句「芭蕉忌に申す茶手向る寒さ哉 樽良」に美角脇付。
連衆はほか春水・波。さらにこの時の作「達摩の画かけて
芭蕉を祭る哉 定雅」（「時雨笛」）。

十月十日頃、東山にて蘭台・彰波・樽良・定雅・美角・正名・春水・呑溟で連句を巻く（『時雨笛』）。立句は「片町は蛸に月さす十夜かな 蘭台」。十夜とは浄土宗の寺で、陰曆十月五日の夜半から十五日朝まで十昼夜の間、絶えず念仏を唱える行事。

十月（中旬以降）、美角亭にて餞歌仙。立句「時雨来よけふを名残の誹諧ぞ 美角」。連衆は、美角・彰波・樽良・定雅。ほか、定雅餞別句「水仙の花を見て居るわかれ哉 定雅」（『時雨笛』）。

彰波編、一二月刊『仏の座』に定雅・美角各発句一入集。彰波父倉石休悟の追善集。上巻は「終焉之記」、追善和歌俳諧、下巻は発句、樽良・彰波らの歌仙二巻を収める。「なれく 數月夜の菊の匂哉 美角」「木からしの吹あれなから 天氣哉 定雅」。

樽良編『年の尾』（『校註俳文学大系』一一）に美角・定雅各発句一入集。同年樽良上洛後の成立。「時雨ノ白壁にすかして見れば時雨哉 美角」「雪けしきかりそめならぬ近所哉 定雅」。

安永六年 丁酉（一七七七） 三四歳

蕪村は毎年のように春帖を刊行、この年は『夜半楽』を編んだ。しかし「当春帳は同盟の社中計にて、他家を交す候」（柳女・賀瑞宛二月三日書簡（『蕪村書簡集』））といつており、美角・定雅の句は収められていない。

樽良編、三月奥の『花七日』（『校註俳文学大系』一一）に定雅・美角各発句一入集。「高台寺ノ花の上に燃たつ春の日和かな 定雅」「御室ノ折くや桜かくるゝはなの袖 美角」。

江涯編、春自序の『仮日記』（『天明俳諧集』）に定雅発句二、美角発句三、「洛東に遊びて」江涯・定雅・美角の連句一入集。収録される蕪村句「水に散りて」は、一月晦日霞夫宛書簡（『蕪村書簡集』）に掲載。また几重句「植木屋の」は『丙申之句帖』の末、六年の作を載せている箇所の三月七日の後に、また『丁酉之句帖』やはり三月三日の句より後に掲載される。几重句「夕寒み」は『丙申之句帖』『丁酉之句帖』の二書において「植木屋の」の句直前に収められる。江涯は安永三年頃、京坂に遊び、四年から七年迄は近江八幡に滞したというが（『俳文学大辞典』）、几重らの句が安永六年春の作であることから推察すれば、時折上洛することもあった

か。ともあれ京の俳諧師との交流は盛んであった。「大内に
近き中川の辺を過るとて／笛の音や梅の花ちる雲の上 美角」
「白川の里にて／地藏きる男は淋し春の里 定雅」「和泉式部
の梅、さかりなれば／幽霊の気しきは見えず梅の花 美角」
「友なくて花見なれたる男哉 美角」「月の夜やすべて桜はう
すぎくら 定雅」(『椿花文集』に再録「月の夜や都てさくら
は薄桜」)

洛東にあそびて

加茂河やゆるく流るゝ春の水

江涯

岸の小石にもゆる陽炎

定雅

蝶なぐる童気がるく牛かして

美角

(以下略)

秋、定雅、病の床に臥す。深刻な容態であつたようである(安
永七年二月二三日の項参照)、この年夏以降翌年迄、定雅の
みならず美角の活動も確認できない。

安永七年 戊戌 (一七七八) 三五歳

二月三日、几童、白梅楼に復調した定雅を訪ねる。

廿三日

定雅のぬし、去年の秋かぜ身にしめる頃ひより、おもきい

たづきになやみふし、露の身の置所さへいとおぼつかなく
も見え侍しが、からうじて生のび、あら玉の春を迎へつ。
松竹の千代の一ふし諷ひもて起たつほど、きさらぎ末つか
たにはなりぬ。ある日かの白梅楼をたづねて、

いざ花に命拾ひし友訪はん

和泉式部の軒端の梅盛りなりと人のいへりしかば、やがて
見にまかりしが、先定雅が白梅楼によりて物打かたるほど
思はず時をつつしつ。いつしか日もくれ誓願寺のそや撞なき夜半の撞つく頃かへるまは
ど驚きついたづらに梅の辺りへも往ずて、帰さ三条の辻東は下山の端照り、西は中
頃になりぬれば、を過るとて、

暗き道をはるかにほへ夜の梅

(几童『戊戌之句帖』(全集3))

三月二六日、几童・美角・定雅で東山に春遊。

廿六日 美角・定雅と(〃)もにひがし山の花に遊ぶ。

此花の下や去年見しさくら人

此花に去年見し人の世にや在

散ル方に目の行花の夕かな

葉桜のに中々ゆかし花の中

(『戊戌之句帖』)

四月九日午前、几童、定雅を来訪。

九日 昼前定雅工行。

(『戊戌之句帖』)

秋來編、七月二三日自序の『封の儘』(全集8)に定雅・

美角連句一、各発句一入集。本書は、安永五年七月二三日、

京で没した雪門の三回忌追善集。「此巻は吾友が望めるにま

かせて歌仙にむすび靈魂をなぐさめ侍る」。立句は「声ふり

て聞ゆ雉子の樹神にも仙陽中新田吾友」、連衆は仙陽中新田吾友・結

城雁石・京定雅・美角・几重兵庫大魯・京無村・仙府秋溥・

秋來・烏有・先山・雲羅・執筆。さらに「木兔が得たる

句々の中より秋の調を拾ふて爰に供し侍る」として「面白や

秋は浮世の恨ぐさ京定雅」「なれくしき月夜の菊の句

ひ哉京美角」。美角句は『仏の座』に既出。

安永八年 己亥 (一七七九) 三六歳

四月(一日か)、上洛した暁台を囲み、美角亭で俳諧興行。

暁台句を立句とした定雅・樽良・美角・白居の歌仙。掲載す

る『反故瓢』二篇は、文政七年刊。同五年刊の定雅俳文集

『文集反故瓢』続編として出された。「例の瓢のうちよりめつ

らしき反故五中はかり執出し」たうちの二つが、「一、暁

台 世に知る所の付句ある哥仙一卷」。

安永八亥年於俗月菴興行

歌仙 前書略す

みやこ人とたちまはしはりぬ更衣 暁台

ありやなしやの花探る夏 定雅

かんこ鳥まちもまうけぬ初音して 樽良

浅黄の雲の空しづかなり 美角

(以下略)

安永九年 庚子 (一七八〇) 三七歳

几重編『初懐紙』には必ず二人で出句していたが、美角の

病または死去の為であるう、この年の『初懐紙』に美角・定

雅の名は見えない。なお、翌年以降の『初懐紙』には定雅句

のみが収載される。

春、美角歿(注)。善導寺に埋葬される。

美角・定雅の墓碑は、既に浅野三平氏が「西村粹川子」中

で紹介されているが、改めてここにその碑面を掲載すれば以

下の通りである。

光雲良照信士 芳需童女

栖霞然空自休禅定門

證誉實空自元禅定尼

心山明照信女 俳仙堂寂誉定雅居士

素月禪定尼

(善導寺内定雅墓碑)

墓碑右面に「吉永氏」、裏面に「栖安永第二年正月十日」とある。

『伴人真蹟全集』(平凡社)には「定雅は西村氏を稱して居るが、この墓碑によつてもと、吉永氏の一族である事が知られる。」とある。墓碑にある「栖誉然空自休禪定門」が定雅の父親、「證誉實空自元禪定尼」が母、そして「光雲良照信士」が安永九年に歿した美角であろう。また、定雅の戒名の隣に刻まれた「素月禪定尼」は定雅の妻と考えられる。^(注)

裏面「栖安永第二年正月十日」は、この墓碑が建立された時を表すが、これは父親の没時と思われる。『椿花文集』下巻春之部に「父の身まかりたまひし時/泪ながらはづすや居間の注連筋」とある。句意から、父親が歿したのは正月頃。なお母の没時は同下巻秋之部に「母の身まかり給ふに/今といふ今ぞ身にしる秋の風」と見え、秋のこと。善導寺は天明の大火(天明八年一月三十日)に被災しているため、寛政八年以前の過去帳は現存しておらず、父母及び美角の没日時について正確に知ることはできないが、ともあれ、『椿花文集』刊行前、即ち天明七年以前に、定雅は両親と兄を失ったことになる。

凡夫編『雪の声』(冬序。全集8)に美角発句一、定雅発句二入集。凡夫序文によれば、樽良は安永七年冬から翌年二月末まで加賀に滞留していたが、その後、上京。「されや其頃の巻く、二とせ三とせ爰かしの文庫に取乱したるをむげにせんも本意なく」本書を出版したという。所収の几童句は安永元年以前に詠まれたもの^(注)、また蕪村句は安永八年序「まだら雁」に収められたものと同じであることから、美角らの句も安永九年より前の成立、八年春、樽良上京の折のものとも考えられる。「友達に別れて戻る時雨かな 京美角」「鶯にこはがられたる立居かな 京定雅」「暁をいやましに月の高き哉 洛定雅」

一二月、几童筆『連句会草稿』(全集3)に定雅発句三入集。

竹田より伏見へ這入胡蝶哉

定雅

春の雪車のナガへぬれにけり

湯を遣ふ娘の臂や背戸の梅

「湯を遣ふ」の句に作者の名前は無いが、翌年几童『初懐紙』に定雅句として載録されている。『連句会草稿』は安永八年四月より翌九年二月までの檀林会記録、間に諸家の文音が散見される。定雅の句は、全三九丁のうち、最終丁表

に載る。定雅句直前には「冬文通」として夢太句が五句並ぶ。そのうち二句「梅守の」「さみせんのは」は、『初懷紙』に「早春、東都雪中庵より書信 二句」として載っており、これらの夢太、定雅の句は安永十年『初懷紙』のための覚書と思われる。

天明元年（安永十年四月二日改元）辛丑（一七八二）三八歳
一月二〇日、定雅、春夜樓檀林会に出座か（几董『初懷紙』（全集7））。連句は蕪村の「具足師のふるきやどりや梅花」を立句とする。連衆は蕪村・几董・道立・月居・正白・百池・定雅・維駒・月溪・執筆。檀林会は、安永八年四月より、毎月二十日を定例日として開催された。安永九年一二月までの会の様子は先述『連句会草稿』によって窺うことができるが、その中に定雅の名はない。

『初懷紙』には、「席上探題」として「湯をつかふ娘の臂やせどの梅 定雅」が載るが、『連句会草稿』の性質、またそれまでの檀林会への不参から考えれば、実際に定雅が檀林会に出座したというのは疑わしい。仮に出座していたとしても、変則的な出席であった。

定雅、美角一周忌追善集『はなこのみ』刊行。現存する版

本は天理図書館綿屋文庫蔵本のみ。九丁から成り、冒頭に「あしたに眠りゆうへに覚てはさなからに病苦をいとふ/枯なからよきなき風の尾花かな 美角」、片膝を立て頂垂れ座る美角像を配す（一ウ）。なお先述の通り、この句は安永五年春序『張瓢』冬之部文音に既出の句で、実際は風に吹かれる枯尾花の情景を詠んだもの。一丁表「柳下社定雅」自序によれば、定雅は友人らと美角一周忌追善会を営み、追悼吟を集めた。それに諸家の四季句を併せて一冊としたという。序中の句「日を三日過てつくく春の夢」は『椿花文集』に「哭美角/日を三日過てつくく春の夢」とあるが、本書の題ともなつた序末句「塚前/花好み果を檀のあるし哉」は不掲載。なお一周忌歌仙の立句「腮に手を当し俳梅に恋し」は、『椿花文集』に「一周春/腮に手をあてし俳窓のむめ」と、句末に異同がある。

本書に追悼吟を寄せたのは、以下の通り。「美角居士一周忌」闌更、「美角世を去て青年猶声有かことし」蕪村、江涯、「友の一周忌になりければ思ひ出で」方信、丁東、蕪風、「花鳥の友を失ひて一周忌の春」季柳、柳女、里董、「梅柳を角か靈に手向て」^備白圭、月居、「としくあぶ期有けるみかくのぬし春の忌日も近しと聞侍りて」合浦、「角の亡靈にむかひて」字江、「窓下に一椀を分つ友なりし亡子が青年の靈

前に向ひて」甫尺、冷五、「亡友角常に翁の暮春の句を讃歎して止す予も又志を同つすよて一周忌を吊ふに其句の趣意をかりて在世を思ひ出る」百池、「死別時」在伏水弟志斉、「亡兄世にいます時はともに南枝の梅を愛し今更此春の梅の一木に感じ消やすき雪の朝こそほいなけれと拙き一句を儲けなして一周の手向とす」全。

「一周忌歌仙」として柳下社友定雅・志斉・古春・柳女・季柳・里童・嵐川の連句。

以降、四季句。蕪村、月居、百池、月溪、几董、暁台、士朗、呑溟、蓼太、樽良、彰波、春水、魚春、正名、馬叟、合浦、龍石、闌更、蕪嵐、去来、字江、化更、とみ、女倭泉、紫蘭、八重、季柳、柳女、嵐川、由翁、里董、方信、備雑庵、白圭、江涯、斗醉、丁東、野菊、秦夫、良水、雲裏、舍樹、素川、麦水、冷五、李音、茶荅、太求、漢良、茶台、在貫、甫尺、羅浮、定雅。卷末に几董跋文を据える。

江涯編 四月序の『浪速住』（全集8）に定雅発句四入集。冬の部に定雅・甫尺・江涯の歌仙。立句は、「うしろより来る人くらき落葉哉 定雅」。「やぶ入の出立や白きもめん足袋 定雅」。「杜若水はさながら夏げしき 定雅」。「秋の暮念仏つかびて申けり 定雅」。「松がえにかすむ日影や神無月 定雅」

注

注1

西村定雅の先行研究として、古くは水落露石「西村定雅」(『水トトギス』明治三十五年一月)、藤井紫影「西村定雅」(『江戸後期の京阪小説家』(『江戸文学研究』大正十年)、昭和に入つて、中村俊定「定雅」(『続俳句講座・俳人評伝篇』昭和九年)、高木蒼梧「定雅」(『俳諧人名辞典』昭和三十五年)、最も新しいものに「西村粹川子」(『女子大国文』第七二号、昭和四九年二月)、『近世中期小説の研究』再録)がある。田中道雄「無外庵既白小伝」(『近世文芸』資料と考証)九、一九七四年二月)による。

注3

『風羅念仏』(天理図書館綿屋文庫蔵)土卯跋文に「既白ありて、此風羅念仏を伝へたり。終焉の時にいたりて椿花のぬしにかの念仏の始末をねもころに伝へ、猶惟然師か手蹟のたんさくをあたふ。」とある。

注4

『蕪村全集』七巻 編著・追善(講談社、一九九五)所収。以下、『全集』。

注5

『俳書叢刊』九(臨川書店、一九八八)所収。

注6

『天明俳諧集』(新日本古典文学大系、岩波書店、一九九八)

注7

几董句入集状況については、浅見美智子編校『几董発句全集』(八木書店、平成九年)を参照した。

注8

古市駿一「近江八幡豪商西川庄六所持 大文字屋文庫翻刻紹介撰(十)」—雲羅坊・呉夕庵江涯と竹庵連中のこと—」

注9

「義仲寺」(四一四号(昭和五三年十月十一日発行)掲載。

注10

古市駿一「近江八幡豪商西川庄六所持 大文字屋文庫翻刻紹介撰(十三)」—雲羅坊・呉夕庵江涯と竹庵連中のこと—」(「義仲寺」一四三三号、昭和五三年十一月十一日発行)安永四年閏十二月十一日付霞夫・乙総宛蕪村書簡(大谷篤蔵・

藤田真一校注『蕪村書簡集』(岩波文庫、一九九二年)に「一、当年は病中ゆへ、例之春帖相休み申候。左様に御心得可被下候。併に春にいたり梅花帖と申ものを出して、春帖の代りにたのしみ可申歟と心がけ居申候。」とする。

注 11

安永四年閏十二月十七日付几重宛蕪村書簡(『蕪村書簡集』)に「一、初くわいし一順見申候。いかにもおもしろく候。申所も無御座候。しかし「野鼠」の句、「つらかく」といふ事、余りもとめたるものにて、却て発句のすがたを失ひ候。」

注 12

『天明俳書集』三 京都編(平成三年、臨川書店)所収。

注 13

文化二年正月元日雲常宛五蓬書簡(日本書誌学大系七四、矢羽勝幸『近世後期俳諧の研究』所収)に「甫尺四月没去。」

注 14

几重『丙申之句帖』巻五(全集3)によれば、この頃、几重や蕪村は頻りに無為庵を訪れている。

『月の夜』中の几重句「明月や朱雀の鬼神絶て出ず」は、句帖に「無為庵兼題八月十二日/月前懐古/名月や朱雀の鬼神たへて出ず」とある。『月の夜』では「雲散りて」連句が巻頭に位置し、続いて蕪村発句、几重「明月や」発句が並ぶ。よって「雲散りて」連句は八月十二日、もしくはその前後に編まれたものと思われる。なお、蕪村と几重は、この句会のために互いに句案を見せ、意見を交わしている(安永五年八月十一日付几重宛蕪村書簡(『蕪村書簡集』))。

注 15

『月の夜』樽良序文に「ことしの秋は洛に遊んどおもひ出て、木屋町の三条なる所にあやしの宿をもとめ」。

注 16

『校註俳文学大系』一一(七部集総覧編三、大鳳閣書房、一九二九)

注 17

拙稿「定雅の年刊句集」(『連歌俳諧研究』第百二号、平成十四年二月)参照。

注 18

浅野氏によれば、善導寺過去帳文政十二年の箇所に、「二月十四日 素月禅定尼 中山江火」とあるという。

注 19

『几重発句全集』による。

付記

引用に際して、必要な際は清濁及び句読点を私に補った。

本稿を成すにあたり、資料閲覧を許可下さいました各所蔵機関及び資料の提供、御助言を賜りました善導寺小川隆宏氏に、心より御礼申し上げます。

なお、本稿は平成十九年度科学研究費補助金(特別研究員奨励費)「近世中期上方文化史の研究」(京都東山文化圏における文人ネットワークを中心に)による研究成果の一部である。

(たなべ なほこ・国文学研究資料館非常勤職員)